

南九州における古墳の出現

柳沢 一男*

※宮崎大学教育文化学部

はじめに

列島の南端地・南九州において、はたしていつ頃に高塚系の古墳が出現したのか、前方後円墳を素材に探ることが今回の課題である、しかし鹿児島の場合、墳丘を伴う古墳のほとんどが何らかの指定を受けているため発掘調査例は少なく、情報量はきわめて限られている。

この地域の古墳出現期については、早くに小田富士雄氏が既往の発見・調査事例を整理して、畿内型古墳の拡充期の5世紀の出現とする考え方を示した¹⁾。しかし、川内市や阿久根市など有明・不知火海に連なる西海岸側では纏向型前方後円墳や狭長な竪穴式石槨が相次いで確認され、前期に高塚系墳墓が出現していることが判明し見直しが進められている²⁾。これに対して東海岸側の志布志湾側では、中期初頭ないし前葉の志布志町飯盛山古墳を最古例として、前期にさかのぼる高塚系墳墓はみられないという理解が通説化している。ここでは、最近公表された肝属郡高山町塚崎古墳群の前方後円墳測量図³⁾を取り上げ、現在その有効性が認識されつつある墳形の型式学的方法を用いて築造時期を推定する。今回の検討作業は高精度の測量図にすべてを負っており、測量調査に携われた関係者の方々に深く感謝申し上げる。

塚崎古墳群前方後円墳の検討

塚崎古墳群は沖積低地に面する標高20mほどの舌状台地上に、前方後円墳4基、円墳39基が現存するほか、これまで13基の地下式横穴墓が発見されている。4基の前方後円墳のうち10・11・16号墳の3基は互いに近接し、40号墳がやや離れた丘陵上の高まりに位置する。10号墳を除く3基に葺石が認めらるが、いずれの古墳からも埴輪や土師器など築造時期を推測しうる資料は採集されていない。

前方後円墳の検討方法は、まず墳丘測量図と現地での所見をもとに墳形の特徴を把握し、モデルとなる墳形の大型前方後円墳(おもに大王墳クラス)を検索する。その後両者を墳形を比較して類似点と相違点を検討し、類型墳の認定を行う。この方法は岸本直文・澤田秀実氏により提示された墳形分析法⁴⁾にしたがい、塚崎古墳群の前方後円墳と対比する墳形の推定される墳端・頂面ラインも両氏の作成されたものを利用させていただいた。

①塚崎11号墳(図1)……北西から南東に向かって下降する台地端につくられ、前方部を地形的に高い北側に向ける。墳丘の西側に沿う細い溝によって多少の変形がみられるものの遺存状況は良好である。後円部の平面形は不整な円形でタマネギ状の平面形を示す。後円部径は約37mあまり、側縁からくびれ部

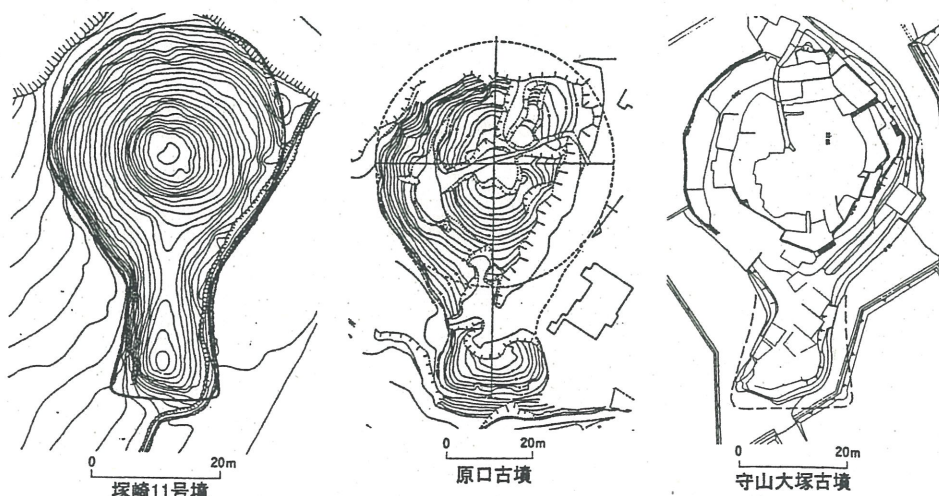


図1.11号墳と類似する古墳

に向かう直線的な連結部が顕著である。東側くびれ部墳端を基準にすると後円部高は約5m、前方部頂は先端に向かってわずかに高まり最高位で2.8mをはかる。前方部は後円部の規模に比較するときわめて短小で、前面隅角が明確でないけれども先端に向かってわずかに撥形に開く可能性

が高い。全長約56m、後円部高に対する前方部高の割合(前方部高/後円部高、以下、後前高比という)は0.56。

墳形の検討……定形化した前方後円墳に類似する墳形はみあたらない。先述したように後円部平面形がタマネギ状を呈し、くびれ部に至る連結部や、前方部長が墳長の約1/3となるなど、纏向型前方後円墳の諸特徴⁵⁾を備えている。この類型は鹿児島県端陵・西都原81号墳のほか、多様な平面形を示す古墳が九州各地に点在する。11号墳に近い墳形をとる例として福岡県原口古墳(約80m)や長崎県守山大塚古墳(現長66m)⁶⁾があげられる。この一群は纏向型類型のなかでも比較的墳丘規模が大きい。

②塚崎16号墳(図2-①)……前方部西側側面の大半が削除され変形が著しい。後円部は直径約25m、高さ3.8m。前方部前面幅は不明、前面墳端が不明瞭のため長さも確定できないが、おおむね16m前後の可能性が高い。くびれ部幅は約12m前後、前方部頂面は先端に向かって0.7mほど高まる。前方部の南側側面墳の端はくびれ部から先端に向かって高まり、前方部隅角で収束する馬蹄形周堀がめぐる可能性がある。南側くびれ部墳端を基準にすると前方部頂の高さは約1.5m。なお前方部平面形は撥形に開く可能性が大きい。墳長は約44m前後、後前高比約0.4。

墳形の検討……前方部の変形が著しいため不安があるが、前方部が比較的長めで撥形に開く可能性が高いことから箸墓類型が墳形の候補となる。墳丘測量図上に約1/3000に縮小した箸墓古墳の推定墳端・頂面端のラインと折角・隅角線を記入すると、くびれ部幅、前方部の頂面端が互いに重なり、さほど明確でない前方部側面墳端はおおむね推定線近くを通り、現状では不明瞭な前面墳端も箸墓の推定墳端線近くに想定して不都合はない。後円部頂面は広さに違いがあるが中心点はほぼ一致する。また立面形も箸墓古墳と重ねると、前方部頂の上に壇を設けた箸墓と多少の違いはあるけれども、壇の部分差し引くとほとんど等しい形状を示し、箸墓古墳1/6の相似墳の可能性が高い。南九州では大型前方後円墳の生目1号墳、小型前方後円墳の西都原91号・100号墳がこの類型に属する。

③塚崎10号墳(図2-②)……後円部は一部に変形がみられるものの平面はほぼ円形、直径約25m、高さ約3mをはかる。前方部先端は隅角が流出し丸みを帯びる。くびれ部周辺の凹みと前方部側面墳端が先端にむかって高まる形状から、前方部隅角で収束する馬蹄形の周堀ないし掘り込みが予想される。前方部の平面形は短小でわずかに撥形に開く可能性が高い。なお前方部頂は先端に向かって0.4mほど上昇する。南側墳端を基準にすると前方部の高さは1~1.4m。墳長約40m。後前高比約0.4。

墳形の検討……上述したように前方部前面隅角は流出して丸みを帯びる。しかし後円部の規模に対して前方部が短く、かつ平面がわずかに撥形に開く可能性があることを考慮すると行燈山類型が候補となる。墳丘測量図上に約1/3000に縮小した行燈山古墳の推定される墳端・頂面ラインとくびれ部折角・前面隅角の線を記入すると、前方部側面墳端に多少の違いがあるが前方部頂端や前方部前面墳端などで整合し、後円部頂面も広さに差異があるけれども中心点はほぼ等しい位置にある。おそらく行燈山古墳の

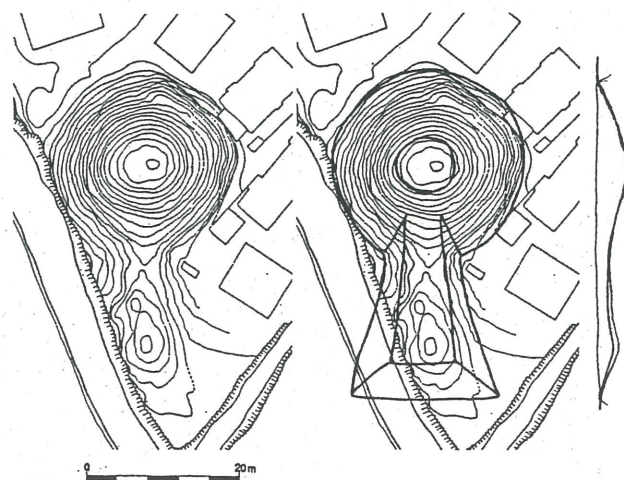
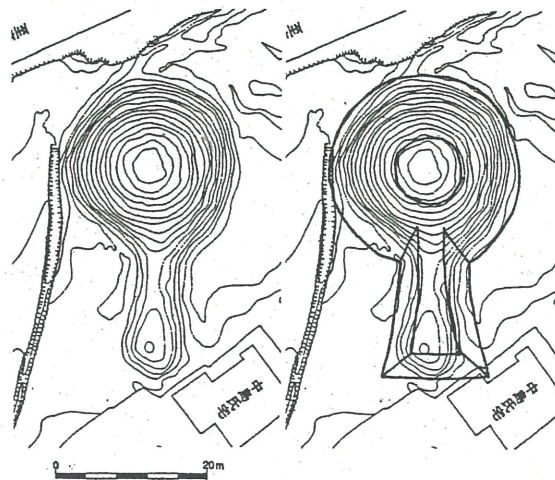


図2. ①16号墳測量図と箸墓古墳墳丘との適合関係



②10号墳測量図と西殿塚古墳墳丘との適合関係

行燈山

1/6規格の相似墳とみてよいだろう。墳丘立面形は行燈山古墳の後前高比(約0.33)よりも高く一致しない。先にこの古墳は西殿塚類型と想定した⁷⁾が、測量図を仔細に操作・検討した結果、くびれ部幅と前方部の幅に大きな相違が明らかになったので上記のように訂正する。

④塚崎40号墳(図3)……台地上の高まり上部につくられ前方部を南に向ける。後円部と前方部隅角墳端の一部が削除されているが全体の遺存状況は良好である。後円部は直径約45m、南側墳端からの高さ8.2m。前方部の墳端は、東西側面とも地形傾斜との境が不明瞭だが、頂面から4mほど下がった等高線付近で傾斜変換が観察できるからおおよその位置を推測できる。くびれ部幅は25m前後、前方部は先端がほとんど開かない。前方部頂は先端までほぼ水平、くびれ部墳端からの高さ約4m。後円部は明確でないが、前方部側面では墳端から2mほど上位にテラスらしい平坦面が観察される。墳長約70m。後前高比約0.5。

墳形の検討……他の3基と比べると、後円部に対して前方部が大型化して高さを増すなど明瞭な違いがある。また先述したように後円部では不明瞭だが、前方部側面は2段築成の可能性が高い。この墳形は南九州には類例がないけれども奈良県五社神古墳の平面形と酷似する。墳丘測量図に約1/2200に縮小した五社神古墳の墳端・頂面の推定線と折角・隅角線を記入すると、くびれ部幅、前方部側面の墳端線、前方部の頂面端、前面墳端がほとんど重なっていることが分かる。また後円部頂面の広さに違いがあるが中心点はほとんど一致し、五社神古墳2/9規格の相似墳とみてよい。しかし墳丘立面形は40号墳の前方部高が低く違いがおおきい。

以上を要約すれば、塚崎古墳群の前方後円墳は、11号が纏向型類型、16号は箸墓類型、10号墳が行燈山類型、さらに40号が五社神類型の可能性が高い。墳形研究のこれまでの成果からすれば、纏向型・箸墓類型(1期⁸⁾初現、以下同)→行燈山類型(3期)→五社神類型(4期)へと推移するから、それぞれの古墳は11号・16号→10号→40号墳という築造推移が予想される。もっともさかのぼる纏向型と箸墓類型の先後関係は明確でないが、纏向型類型の11号墳は出土鏡が舶載三角縁神獣鏡3面だけで構成される原口古墳と墳形が酷似することを唯一の手がかりにして、今はとりあえず10号墳に先行する可能性を想定しておきたい。

墳形の型式学的研究から導き出された築造時期はすべてが前期のうちに収まることとなり、これまでの通説とはずいぶん異なった結論となった。本作業の可否の検証を含めて、南九州の古墳出現時期について議論が盛んになることを願う。

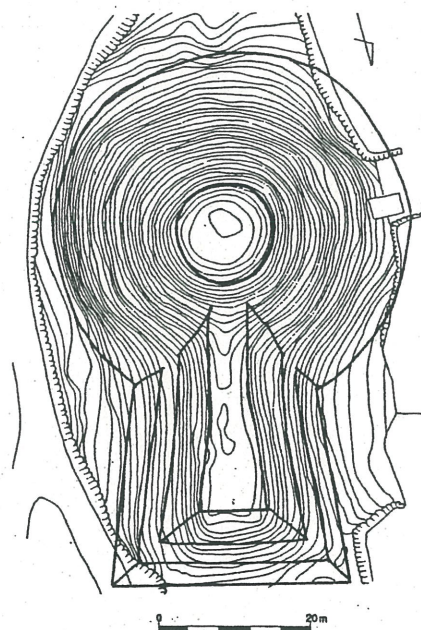


図3.40号墳と五社神古墳墳丘との適合関係

- 1) 小田富士雄「古墳文化の地域的特色—九州—」『日本の考古学』IV(河出書房新社, 1966)
- 2) 池畑耕一「高塚古墳の南限とその築造時期」『九州上代文化論集』(乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会, 1990),
- 3) 中村耕治「先史・原始時代」『高山郷土誌』(高山町, 1997)
- 4) ①澤田秀実「墳丘形態からみた権現山51・50号墳」『権現山51号墳』(権現山51号墳刊行会, 1991), ②岸本直文「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』39-2, ③岸本直文「『陵墓』古墳研究の現状」『陵墓から見た日本史』(青木書店, 1995),
- 5) ①寺澤薫「纏向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズIV, 1988, ②柳沢一男「前方後円墳の展開」『新版 古代の日本』3(角川書店, 1993)
- 6) 前方後円墳『九州編』(山川出版社, 1992)では墳長70mとしているが、新測量図によれば現状で66mという(藤田和裕編『県内古墳詳細分布調査報告書』長崎県教育委員会, 1992)
- 7) 柳沢一男「大幅に遡るか?、南九州の前方後円墳出現時期」『九前研通信』4号(九州前方後円墳研究会, 1999)
- 8) 以下に使用する○期という時期区分は『前方後円墳集成』(山川出版社, 1991~1994)の編年案に従っている。